

Q 「さらしな」が都人のあこがれで至高の色である白のイメージであることは分かりました。俳人の松尾芭蕉も「さらしな月」に大変あこがれたということですが、俳句という「わび・さび」といった簡素なイメージがあり、極彩色のイメージがある都の文化となかなか重なりません。

A 長野冬季オリンピックの開閉会式の公式プログラムのデザインを作った原研哉さんの著書「白」（中央公論新社）を読み、「空白」という概念が、その理由を明らかにする一つのカギではないかと思うようになりました。さらしなにあこがれた都人と俳人は、「空白」に美を見る美意識を共有していると思うのです。

何もない「空」の世界を色で表現するときに使われるのは「白色」です。白い紙や降り積もったばかりの雪を前にすると、そこに何かを描いたりしたくなりますが、それはそこがまだ何もない「空」の世界だからです。「空」と「白」はコインの表裏の関係なのです。

そして、「空」と「白」双方が表現されているのが、神社だと思えます。よく家の新築のときに、土地の真ん中あたりの四隅に杭を打ちそこに縄を回して神官が祝詞をあげる儀式が営まれますが、原さんの著書によると、それが神社の原型だそうです。つまり、杭と縄で何もない空間をつくることで、そこに神が入る場を設けるのです。杭や縄に付ける紙（御幣）は真っ白です。ここにも「空」と「白」が同時に、一緒に表現されています。

原さんによると、その空間は「代」と呼ばれるそうで、「白」と同じ音です。語源的に一緒なのか違うのかはつきりしたことは分かりませんが、大変意味のある符合です（ちなみに、代の空間に屋根を被せたことから屋代となり、いまでも神社のことを親しみを込めて呼ぶときの「おやしる」となります）。こう見ると、神官の装束が白色であるのもうなづけます。

神社に込められた精神性は、伊勢神宮（三重県伊勢市）に祖先をまつる天皇家に象徴されるように、都の人たちにも流れていました。それは現在でも、年始参りを欠かさない日本人に流れ続けていると思えます。江戸後期から盛んになった俳句の世界に取りつかれた人も、同じ精神性を持っていたはず。

俳句という文芸の大きな特徴は省略です。言わない、書かないことによって「何もない『空』の世界」をあえて作りだしたとも言えます。神社の精神性を持っていますから、その「空」の世界には無意識のうちに「白色」を見ていたと思えます。古代から中世にかけて都人の美意識によつてすでに「さらしな」は、白色を強烈にイメージさせる地名になっていましたので、「さらしな」を訪れることが俳人たちの大きなあこがれになった可能性があります。

伊勢神宮はことし、20年に一度、社殿を改築する遷宮の儀式が営まれる年です。写真は食物・穀物の神様をまつる下宮の境内。現在の社殿はこの右側にあり、この何もない「空」の場所に、今年新たに神様を迎えます。

神が宿る代

平成二十五年 第六十二回式年遷宮御敷地
平成二十五年 第六十二回式年遷宮御敷地

